

学生の身体表現意識

岡本雅子

はじめに

子どもたちに質の高い身体表現活動を提供するためには、身体表現力・身体表現意識の高い保育者が不可欠である。筆者は現在、幼児教育・保育科学生に「表現（身体表現）」を指導しているが、常々、目の前にいる学生達が、2年間に何を身につけるべきか思案している。保育者として必要とされる身体表現は、具体的にどのようなものであり、学生達が認識しているそれと、どのような点においてギャップがあるのか。そして、そのギャップを埋めるために何を指導すべきか。

大学生の学力低下が社会問題となって久しいが、その他にも生活力の低下、コミュニケーション能力の低下を強く感じ、保育者養成の難しさを痛感している。また、今年度より絶対評価で育った学生が入学し、客観的視野という面においても低下が懸念される。そのような中、何とか2年で最大限に成長させたいという思いから、身体表現における、現職保育者と本学学生の差異を明らかにし、今後の指導のあり方や課題解決の糸口としたいと思っている。

具体的には、今回は本学、短期大学部幼児教育・保育科学生全員に、身体表現が豊かな保育者とはどのような保育者であると思っているかを問い、学生の身体表現意識

を明らかにしたい。そしてその結果を基に、学生生活の中での意識変化や育ちについて検討する。

今後は、今回の結果を基に現職保育者の意見を伺い、身体表現意識の指標を作り、経年経過を見たいと思う。また、現職保育者、他大学（4年制を含む）学生との比較を行い、現職保育者の身体表現意識を基に、保育系学生に共通する課題、短大生の課題にも迫りたいと思う。

研究方法

1. 調査対象：幼児教育・保育科学生
1年生113名（男子6名・女子107名）
2年生117名（男子5名・女子112名）

2. 調査時期：平成18年11月

3. 調査方法：質問紙調査（自由記述）

「身体表現が豊かな保育者とはどのような保育者であると思うか」○が得意な人。○が好きな人。○に気づく人など、思いついたことを自由に記述。エピソード可。

4. 分析方法

学生の記述を、その要素別に分類し、一人当たりの記述数の平均値を学年で比較する。またその要素を特性毎にまとめ、どのような身体表現の特性に対し学生の意識が高いのか、或いは逆に意識が低いのか、全体的な傾向と学年による差異を明らかにする。

特性の分類は、本山益子・鈴木裕子・西洋子・吉川京子の身体表現の分類¹⁾を参考にし、保育者の意識との比較を試みたが、今回の調査は自由記述のため、その項目のうち複数に該当する、或いは該当しないケースが多く、断念した。

そこで、今回は学生の記述を46項目の要素に分類した。そして、その内容から13項目の特性に分類した。更にその内容を「感性」、「コミュニケーション」、「身体表現」、「その他」の4つの大きな特性にまとめた。

結果・考察

1. 記述数について

下記の表は、学生の記述を各要素に分け、その数を一人当たりの平均値でまとめたものである。

学年別に見ると、1年生の記述数の方が、2年生よりも多いことがわかる。しかし、その内容は次に述べるが、「絵・製作が得意、好き」など、表現活動ではあっても身体表現とは言えない記述が、1年生により多く見られることや、「コミュニケーション」に関する記述が非常に多かったことが原因と思われ、数の多さが意識の高さに直結するとは言えない。

また、男女差については1年生は差がなく、2年生の男子学生における記述数が、女子学生の約半数の記述数という少なさが目立つ。しかし男子の母数が非常に少なく、個人差も大きいため、性別による差は明らかでない。

	1年生		2年生	
	記述数 平均値	回答者数	記述数 平均値	回答者数
女子	4.96	107人	3.86	112人
男子	5	6人	2.2	5人
全体	4.96	113人	3.79	117人
標準偏差	5.66		2.12	

2. 特性について

別添資料「身体表現意識」46項目は、学生の記述から身体表現の要素を抽出し、その記述数をまとめたものである。また、それらの要素を13の特性に分類し、その割合(%)を下記にまとめた。

		1年生	2年生
感性	感性	4.6	9.4
コミュニケーション	性格・物事に取り組む姿勢	14.2	14.1
	対人的な姿勢	20.7	12
	対人的言動のあり方	18.8	7.8
	子どものリアクション	2.5	2.1
身体表現	手遊び・お遊戯	0.6	0.2
	遊び	2.5	3.5
	運動	5	10.6
	ダンス	10.9	15.1
	音楽	5.2	3.3
	模倣・表現	8.3	12.2
	体力	1.2	4.9
その他	その他の表現	4	0.9

(1) 感性について

この表からわかるのは、2年生の記述が1年生の記述の約倍の割合を占めることである。その要素を詳しく見ると、①発想力、③感受性に関して、特に顕著に現れている。これらの要素は、身体表現に限らず、表現の土台とも言える要素であり、2年生の方がそのことを実感している者が多いと言える。また、1年生においても発想力について

1) 本山益子・鈴木裕子・西洋子・吉川京子、保育の中の「身体表現」—その現状と展望—、保育士養成研究第20号、pp.93-107、2002

での記述は多く、豊かな身体表現と発想を関係付けて意識していると思われる。

（2）コミュニケーションについて

コミュニケーションについては、1年生の記述が56%を超えることが特徴的である。2年生も36%と多くの割合を占めているが、それを更に2割上回っている。特に、「対人的な姿勢」、「対人的言動のあり方」に関してその傾向が強い。

「性格・物事に対する姿勢」に関しては、割合としては両学年に違いは見られない。しかし、⑨積極性、⑩素直に関して1年生の記述が多いと感じる。

「対人的な姿勢」を見ると、2年生に比べて⑪社会的、⑭笑顔、⑯思いやり、⑰気配りに関する1年生の記述が多いことがわかる。これらは、⑨積極性、⑩素直と同様に保育者として当然求められる資質である。1年生はこれらの資質面と身体表現の豊かさを関係付けて認識しているようである。「対人的な姿勢」においては、2年生は唯一、⑬表情に関する記述で1年生よりも多い。1年生の⑭笑顔>⑬表情の比率と逆転しており、単なる笑顔から表情の豊かさへと、身体表現の豊かさを感じるポイントが変化しているところが興味深い。

「対人的言動のあり方」については、全ての項目で1年生の記述が多い。⑳「人前での堂々とした態度」については、「恥ずかしがらずに堂々と踊る」、「堂々と大きな動き方をする」などと具体的な場面設定がなされている場合には「身体表現」の㉑「動き方」に分類し、場面設定がない、或いは生活全般をイメージさせる記述を㉒「人前での堂々とした態度」とした。

「子どものリアクション」に関しては、

両学年の違いは見られないが、子どもの反応から保育者の身体表現の豊かさを感じるという視点、記述の仕方が面白い。

これらのことをまとめると、1年生は、人との関わり方や人前での態度・言動と身体表現の豊かさを関係付けていると思われる。2年生においてその割合が低いのは、保育者として当然のことと認識している結果であるなら非常に喜ばしいのだが、これは経年経過を見ないと明らかでない。表情に関する意識は、両学年共に高いと感じるが、1年生は笑顔に集中しているが、2年生になると、単なる笑顔から表情の豊かさへと身体表現の豊かさを感じるポイントが変化しており、学年による意識の差異が見られる。

（3）身体表現について

身体表現については、2年生の記述において約50%を占めることが特徴的である。1年生においても30%を超えているが、身体表現に関する質問であるので、多くの記述があることはある意味当然であり、予測はできた。2年生の記述は、特に「運動」、「ダンス」、「模倣・表現」の記述が多い。これは、運動やダンスなど、具体的な活動をイメージして回答しているからであると思われる。つまり2年生は、保育者の資質的なもの、或いは生活の中で見られる身体表現よりも、実際の活動中に外に表出される身体表現を具体的にイメージしている。そして何らかの身体的活動中に外に表出される場合に、身体表現の豊かさを感じていると言える。「感性」に関する考察と合わせて考えると、2年生においては、具体的な身体的活動をイメージし、感受性や発想力など、いわゆる表現の土台である感性が、

その活動における豊かな身体表現に必要なだと捉えていると考えられる。

また、「模倣・表現」に関しては、子どもとの関わりを豊かにすると考えていると思われる記述が多い。

「音楽」を「身体表現」に分類することについては、音を伴った動きの際に、「音楽・ピアノ・歌が得意、好き」な保育者の身体表現が豊かであると解釈した。しかし、自由記述であるので、音を伴った動きをイメージしておらず、単に「音楽が得意＝身体表現が豊か」と意識している可能性もある。1年生の記述が多いことから、その可能性は大いに考えられる。今後指標を作る際には、この点を明らかにする必要がある。

(4) その他について

「その他」に関しては、やはり1年生の記述が多く、2年生の約4倍の割合を占める。これは前述の「絵・製作が得意、好き」など、表現活動ではあるものの身体表現とは言い難いもので、1年生においては「何が身体表現なのか」を認識していない、或いは意識していない学生も少なくないということがわかる。

おわりに

今回の本学学生に対する調査は、1年生は保育所実習、2年生は全ての実習²⁾を終了した段階で行った。そのためか、2年生の記述には、実際に実習等で出会った保育者を、具体的にイメージして回答したことが推察されるものが多くあった。つまり、子どもとの関わりを通して、子どもにとっ

て魅力的な、子どもをひきつける、身体表現が豊かな保育者の姿を実感したのであろう。その点においては、やはり具体的なモデルとなる、現場の先生方の存在が大きいのだと感じた。

今後、経年経過を注目していきたい点は、学生の表現の豊かさが、山本の言う幼児の表現のメカニズムである「層の構造」³⁾と同様に発達すると考えるならば、専門知識、実習経験によって、2年次の身体表現意識に変化があるのか。そして、現1年生の「コミュニケーション」に関する意識の高さは、次年度には何らかの変化を見せるのか。調査を継続し、コミュニケーション能力と身体表現の豊かさの関係性についても、考察を進めていきたいと思う。

また今回は、学生の自由記述の解釈という点で、学生の意図を十分に汲み取れなかった可能性がある。また、「感性」、「コミュニケーション」、「身体表現」という分類では不十分な面も否めない。今回は、今回の結果を基に指標を作成し、評価法というスタイルで調査をする予定であるが、カテゴリーについて検討、修正をしたいと思う。

2) 教育実習(1年次・2年次、各2週間)・保育所実習(1年次1週間、2年次3週間)・施設実習

3) 山本和美, 幼児の表現を豊かにするための保育についての一考察, 保育学年報, pp.86-98, 1989

身体意識調査		1年生	2年生	
感性	感性	① 発想力	15	22
		② ユーモア	1	2
		③ 感受性	6	16
		④ 心の広さ	2	0
コミュニケーション	性格・物事に取り組む姿勢	⑤ 明るく元気	27	26
		⑥ 行動力	11	15
		⑦ 臨機応変	16	14
		⑧ 判断力	5	1
		⑨ 積極性	11	4
		⑩ 素直	4	0
	対人的な姿勢	⑪ 社交的	15	6
		⑫ 人を楽ませることが好き	0	1
		⑬ 表情	15	20
		⑭ 笑顔	28	7
		⑮ 共感	4	0
		⑯ 思いやり	12	1
		⑰ 気配り	34	15
		⑱ 協調性	0	1
	対人的言動のあり方	⑲ リーダーシップ	9	4
		⑳ 人前での堂々とした態度	20	8
		㉑ 周り全体を見る・観察力	21	10
		㉒ 声の大きさ	12	3
㉓ 声の質		8	0	
㉔ 話し上手		17	5	
㉕ 子ども目線の言葉がけ		11	3	
子どものリアクション	㉖ 子どもに好かれる	3	4	
	㉗ 子どもをひきつける	10	5	
身体表現	手遊び・お遊戯	㉘ 手遊び・お遊戯が得意、好き	3	1
		㉙ 遊びが得意・好き	13	15
	運動	㉚ 運動が得意・好き	26	45
	ダンス	㉛ ダンスが得意・好き	25	46
		㉜ 動き方	32	18
		㉝ リズム感	8	16
	音楽	㉞ 音楽・ピアノ・歌が得意、好き	27	14
	模倣・表現	㉟ 動きの発見・アレンジ	5	0
		㊱ 模倣	1	8
		㊲ 即興性	13	5
		㊳ 表現力	14	17
		㊴ 演技力	0	5
		㊵ リアクション	10	17
	体力	㊶ 体力	1	7
㊷ 運動量		4	6	
㊸ 柔軟性		1	8	
その他	その他の表現	㊹ 絵本・紙芝居	9	2
		㊺ 製作・絵画	11	2
		㊻ 字	1	0